

氏 名 ^{サチコ タキ リース} Sachiko Taki Reece
 学位(専攻分野) 博士 (教育学)
 学位記番号 論教博第 124 号
 学位授与の日付 平成 19 年 3 月 23 日
 学位授与の要件 学位規則第 4 条第 2 項該当
 学位論文題目 重度情緒障害児のための箱庭療法の実践的研究

論文調査委員 (主査) 教授 岡田 康 伸 教授 藤原 勝 紀 教授 河合 俊 雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、著者の臨床現場の箱庭療法による心理治療の実践を背景に、同時にその成果と効果を見なければならないことを意識しながら、箱庭療法の経過とそこにみられる子どもの遊びの変化と子ども自身の変化を記述した、4章より成るものである。

第1章は文献レビューと本論文の研究方法与目的が詳しく述べられている。USAにおける重度情緒障害児のケアシステムの歴史的背景と実際とを紹介し、今日問題となっている心理療法の成果と効果に関する量的、質的研究をもレビューしている。また、被験者の説明及び箱庭療法実施上の倫理問題などへの配慮に触れながら、本研究のデザインが注意深く述べられている。

第2章は各事例の箱庭療法の治療過程が述べられている。

第1節の事例は、11歳で、男子で、メキシコ系アメリカ人である。12回の過程で、箱庭の作品変化と本児の情緒の変化、情動の制御、関係性の変化などが呼応していることを実証する。また、他の事例においてもあるが、ユング派の考えやユング派以外の考えも取り入れて、読者が納得できるように箱庭過程を説明し、箱庭療法の過程を考察する。

第2節の事例は、アフリカ系アメリカ人で、11歳11ヶ月の男子の事例である。「井戸の水」や「偶然の出来事」や本児のすばらしい物語で治癒していく過程の報告である。

第3節の事例は、アフリカ系アメリカ人の10歳の男子である。初期の頃は「理想郷」的な作品から始まり、怪獣、戦い、となっていく。しかし、それほど崩れきらない作品の印象である。

第4節の事例は、アフリカ系アメリカ人の10歳11ヶ月の女子である。11回の過程が示されている。魔女の活躍やハートの作品などセラピストを驚かせるほどの美しい、力動的な作品を作ったことが報告されている。

第5節の事例は、アフリカ系アメリカ人の9歳の男子である。「つなげる」をテーマに展開された点に注目して、彼の箱庭療法過程を考察している。なお、本例のみがこの時点での外的な治療効果や教室での目立った行動の変化は報告されていない。

第6節の事例は、メキシコ系アメリカ人で、英語はあまりできない、11歳の男子である。治療中に入院に至ったものであるが、箱庭の作品は順調に変化しており、心理的、内的治療は起こっていると考えられる。

第7節の事例は、アフリカ系アメリカ人で、11歳の男子である。11回の箱庭療法過程が報告されている。

第3章は事例の総合的考察である。ここで、対象者の背景や乳幼児期の状況がまず述べられている。7事例の提示ではあるが、各事例をセッション毎に、カルフの発達段階から評価し、整理した。箱庭では年齢相当の発達段階での遊びがなされているとは限らず、子どもの心理的な必要性や内的必然性などによって遊びが展開されていた。子ども自身が自分に合った適切なレベルの遊びを選択していることがわかった。箱庭療法の7種類の遊びに焦点づけ、個々の子どもの遊びを分析した結果、ADHDの診断名を持つ子どもの遊びは象徴的ドラマに語りがないことと遊びが感覚運動的な遊び、造形的な遊びなどの身体を使う運動/遊びを多くしており、ADHDの診断名のない子どもたちは幾種類もの遊びをしていても、それらの

遊びはお話に組み込まれていて、まとまりがあるという結果を示した。

第4章は著者が日常生活で、例えば、なぜか微笑んでいることに気づき、それが箱庭を作ってくれた子どもと関係がありそうと思い、子どもとの関係とセラピストの経験などをたんねんに集積した。その結果、日常生活での出来事がたいせつで、治療関係の場の交流にエネルギーの増加や熱心さや探求への原動力を得ることなどが明らかとなった。これらが治療効果に影響すると論じた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、著者がUSA（以下アメリカ）における重度情緒障害児の箱庭療法の治療経験を背景に、医療経費と箱庭療法の治療効果や有効性との関係を実証することを求められている現実に対応するために、企画した実証的研究をまとめたものである。このため、12回を目安に（研究と言う点では長期にわたる箱庭療法の実践報告であり、一般の治療では短期になるが。）箱庭療法が実践された、6歳から12歳までの男子6例、女子1例の計7事例を基に、研究した報告である。

いままでの心理療法の成果に関する研究は数量的なものが多く、心理療法や箱庭療法の成果は明確に示しえなかった。しかし、本研究では、質的に実証することを目指して、事例を集めて、箱庭の作品の変遷を示めし、日常生活で、子どもがどのように、変化しているかを丹念に報告したことがまず、評価された。とくに、子どもたちの経験の記述によって、箱庭の成果が示されており、これもまた、数的でないエビデンスであろうと検討された。どのケースも早期の母子関係は破壊されており、養護施設や病院に入院している子、家庭に恵まれない子どもたちであり、難しい事例であるが、子どもたちはよく変容しており、著者の治療力が認められた。

著者は、遊びを分類して、ADHDの子どもとそれ以外のこどもの遊びに違いがあることを強調した。すなわち、ADHDの診断名をもつ子どもの遊びは象徴的ドラマに語りがないことと遊びが感覚運動的遊びや身体を使う運動／遊びを多くしたなどの特徴があり、ADHDの診断名のない子どもが幾種類もの遊びをしても、それらの遊びはお話に組み込まれていて、まとまりがあるという興味深い結果を示した。これらを実証したことは、たとえ7事例にすぎないにしても、ADHDのこどもの特徴を表わしており、また、今後の研究にも刺激を与えるであろうと評価された。これを考察しなおして、診断基準に従い子どもを分けるだけでなく、子どもの遊びを丹念に記述することによって、こども像を示し、その子がどのように変化し得るかを示すことで、例えば、ADHDのこどもの可能性はもっと広がることが示せたのではないかと提案され、検討された。また、心理療法の成果や有効性についてもこれまでは外からの評価であったが、このこどもの遊びを子どもの内側から丹念に述べることによって外からではわからない、子ども側からの成果と有効性を示しうのではないか。この論文にはその可能性が感じられると評価された。

事例によっては、箱庭療法だけの効果というよりも、担任の役割が大きいものもあり、連携の大切さも感じられた。著者もこの点は感じており、十分に担任と連絡をとって箱庭療法を実施していたという。また、担任も箱庭のよさを知っており、子どもに箱庭を作るように言ったりしていたという。連携の大切さを再認識した。

アメリカにおける箱庭療法の実践であること日本と比べ、どのような特徴があるかが検討された。対象者の障害の酷さは日本とアメリカを比べれば、アメリカのほうが非常に厳しい。また、いろいろな民族が含まれており、母国語はさまざまであるが、アメリカ的なものはなにか、特に、セラピスト（ここでは著者）と子どもたちとの関係はどうかを検討された。クライアントが（ここでは子どもたち）アメリカにおいてはセラピストのために何かするようなことはなく、日本人がセラピストにプレゼントをするのと大きな違いがあるなどと心理治療に関しても検討された。

「効いた、効かない」の問題ももう少し長い目でみる必要がある。箱庭をし、それほど行動に変化がないと思われても、2—3年後に効果が出てくることもある。子どもを長い目で見、子供の全体を見ていくことが心理臨床家には求められているが、本論文はこれらを刺激するものであると高く評価された。アメリカにおける心理療法の成果と有効性についての研究はあまりにも一面的ではないかと疑問が投げかけられた。

箱庭療法の創設者のカルフは箱庭過程を3段階に分けているが、著者はこれを5段階に分けて、箱庭過程をより細かくわけることで、過程を説明しやすくしているのは評価された。

箱庭療法のよい点は何かと検討されたが、著者は、「箱庭は母国語と言った言葉ではなく、自分自身の言葉であり、それ

は内面に向かっている」と主張した。箱庭療法は内界に向かうとともに全体性を見ているものであろうと検討された。

数量的なエビデンスが主張される中で、それに対抗するためにも7事例ではあるが、その変容過程をしめすことで、箱庭療法が心理的な治療効果があることを示した。これもまた、エビデンスであることが高く評価された。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成19年1月24日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。